

## 広島・長崎-原爆投下の経緯・被爆検証-

野呂 浩<sup>\*1</sup>

## Hiroshima・Nagasaki-Examining the path to and victims of the atomic bombing-

Hiroshi Noro<sup>\*1</sup>

From a military point of view General Douglas MacArthur considered the atomic bombing completely unnecessary. However, it has been said that the atomic bombs were dropped on Hiroshima and Nagasaki in order to bring an instant end to the war and avoid a bloody invasion of Japan.

When we examine the background of the atomic bombing decision, some other elements are revealed. Among these elements was the USA's intention of making Russia more manageable by possessing and demonstrating the bomb as well as a very strong anti-Japanese prejudice against Japanese people as a whole after the surprise attack on Pearl Harbor. The Japanese were thought to be demons, a monkey race, savages, and beasts during the war. The military, scientists and politicians all wanted to use the atomic bomb in a real war. In addition, President Truman's personality played an important role in the decision to drop the bomb. Thus, it is a historical fact that the decision to drop the atomic bomb was made not only with a military purpose but also within a context of immense social and political complexity.

In Hiroshima 70,000 people were killed instantly, and 60,000 died by November that year with another 70,000 deaths by 1950. Most of them were victims of a new method of killing — radiation. The explosion in Nagasaki killed some 70,000 people, and another 70,000 died from radiation within five years of the initial bombing.

When we face the tragic history of the atomic bombing, we know we must cry for the abolition of nuclear weapons, and at the same time it is absolutely necessary to avoid creating a world rife with disputes and racial discrimination. Today the two nations' relationship (Japan and U.S.A.) has improved in various ways compared to 60 years ago, but if we look at the present situation around the world, unfortunately we still find the seeds of various disputes and prejudices as well as actual wars.

Everybody knows that our earth will be destroyed by a total nuclear war if we have a third world war. Therefore the military, scientists, and politicians must choose 'co-existing or co-perishing' before making any decision to use a weapon of mass destruction since that person must know very clearly it is directly linked with the doom of the whole earth.

---

\*1 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授  
2005年9月12日 受理

## I

2005年は戦後60年の年であるせい、先の大戦、特に広島・長崎の原爆投下を各メディアも様々な視点から取り上げ報道している。

ヴァイツゼッカー元ドイツ大統領は敗戦40周年の演説で「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる」と述べている。<sup>(1)</sup> 過去と対峙しなければ、現在の世界が抱える諸問題を的確に認識することが困難になる。また現在および未来の構築に過去の歴史の教訓を生かすこともできなくなろう。アジア諸国から日本人の歴史認識を問う声が一層強まる。昨今、検証しなければならない事項は数多くあるが、先の大戦、とりわけ人類史上最初の核戦争となった「広島・長崎への原爆投下」の歴史を見つめ直す必要がある。

今回の考察では、米軍の資料等を参照しつつ、「広島・長崎への原爆投下」の経緯、背景を中心に分析する。なお、被爆体験を綴った原稿が筆者の手許に届けられたのでその手記も紹介させて頂く。

## II

1945年8月6日、日本時間の午前1時45分（アメリカ時間では8月5日）、濃縮ウラン型原子爆弾「リトル・ボーイ」を搭載したエノラ・ゲイが西太平洋マリアナ諸島のテニアン島を飛び立つ。因にこのエノラ・ゲイ（ENOLA GAY）とは機長ポール・テイベッツの母親の名前である。機長は、爆弾投下に失敗し日本の捕虜となったときのためか、胸ポケットに12個のカプセル（致死量の青酸カリ）を忍ばせていた。<sup>(2)</sup> 目視確認による投下命令のため天候観測機がエノラ・ゲイに先行して、広島、小倉、長崎に向かっている。午前7時半広島上空の観測機から投下可能の雲量である連絡が入る。機長は投下の決断をし乗組員に伝達し、午前8時15分に爆弾を投下。天気は晴天で、対空砲火などもなく予定通りの投下。高度9500メートルから投下され、炸裂地点の高度580メートルまでを、約43秒の時間をかけて落下、炸裂。<sup>(3)</sup> 機長は旋回して目視した結果、到底現実とは思えなかったと振り返っている。<sup>(4)</sup> ロバート・ルイス副機長も、2分前に見えていた都市が蒸発してしまった。忘れられない光景であると述

懐している。<sup>(5)</sup> 高度約1万メートルから見た尾部機銃手のジョージ・キャロンは、「地獄を垣間見た」と証言している。<sup>(6)</sup> 人類史上初めてのウラン爆弾炸裂である。<sup>(7)</sup> 広島に事前通告は一切なく、その巨大な破壊力により一都市が一瞬にして廃墟と化す。爆心地から600メートル以内は2000度にもなり、死者のほとんどは即死。アメリカ戦略爆撃調査団の報告によると、合計7万人が即死、11月までに6万人、1950年までに7万人死亡。<sup>(8)</sup>

8月8日には、ソ連が日本に対して宣戦布告。その翌日に、第2の原子爆弾プルトニウム型爆弾で広島型の1.5倍の威力のある「ファット・マン」を積載したB29「ボックス・カー」がテニアン島を離陸。当初の原爆投下地点は軍需工場の多い小倉であったが、雲で目視爆撃が不可能と判断。深い朝霧が強い日ざしのもとで晴れていた造船の街、長崎に、午前11時2分に投下。<sup>(9)</sup> 約7万人が亡くなり、その後の5年間でさらに7万人が死亡。2回目の原爆投下は、当初は8月11日に予定していたが、爆撃の日時の決定が任されていた現地司令官の気象上の判断により予定より早まる。

広島への原爆投下後、日本に次の原爆投下までの間に降伏する時間的余裕を与えなかった、とマーシャル将軍が認めている。<sup>(10)</sup> 原爆投下目標都市には、広島だけでなく、京都、それに新潟も含まれていた。広島の後、攻撃による心理的効果も大きく目標には大都市を含める方がよく、東京を加えるべきだとの提案があったが、結局ワシントンからの回答がなく、従来の方針に沿って長崎に投下。<sup>(11)</sup>

ワシントンで開催された4月27日の目標委員会（Target Committee）では、京都、広島、横浜、小倉の4都市が選ばれていた。しかし、横浜と小倉が除かれ、新潟が加わる。この段階では長崎はまだ目標に加えられていない。長崎は広島の代替であった。

広島、長崎への原爆投下によって、日本は原子爆弾が連続的に使用可能である現実を知る。<sup>(12)</sup> テイベッツ将軍は、長崎爆撃直後に日本が降伏しなければ、さらに核兵器が使われたと思うかとの質問に、3発目の原子爆弾を使用できる準備をしていた、と答えている。<sup>(13)</sup>

もともと原爆製造計画は、ドイツに先に原爆を作られる恐れから出発している。テイベッツ将軍は、分割作戦を訓練済みで、もっと早く原子爆弾が使え

たら、部隊の一部はドイツに、一部は日本に当てていた。ドイツが戦い続けていれば、当然確実にドイツにも落とされた、とも語っている。<sup>(14)</sup> 原爆投下によって、日本が降伏を真剣に考えるようになる。また、歴史家のロバート・ビューターは、さらにソ連参戦が重なって、終戦に至ると論じている。<sup>(15)</sup>

### Ⅲ

マッカーサー将軍でさえ、軍事的には日本への原爆投下は、まったく不必要であると考えていた。<sup>(16)</sup> 原爆を使用しなくとも日本の降伏は確実であったにもかかわらず、原爆投下は日本の軍国主義体制を打ち倒して戦争を即座に終わらせ、日本本土上陸作戦で日本人、アメリカ人双方の多大な犠牲を避ける目的であったとはよく聞く説である。アメリカ兵 50 万の命を救うためであったとも言われているが、しかし、この数字は決して客観的な事実裏付けられたものではない。1945 年 6 月 15 日付けで出された統合戦争計画委員会の報告書では、九州南部から上陸し関東平野に侵攻する日本本土上陸作戦による戦死者の予想は 50 万人ではなく、4 万人であるとの記録が残っている。<sup>(17)</sup>

マッカーサー将軍が原爆投下の決定を知らされたのは、エノラ・ゲイが飛び立つわずか 48 時間前である。実際、将軍は広島に原爆投下について激怒している。当然将軍は原爆投下に至る経緯等は理解していなかったと思われる。

当時は東欧およびアジアで勢力を拡大していたソ連の存在を許容できない国際情勢があった。トルーマン大統領の日記や回顧録などからも、大統領は日本との戦争よりもむしろソ連対応に多大な関心を向けていたことは明白である。米国が原子爆弾を作り、その威力を示すことができれば、ソ連を封じ込めることが可能であると考えていたのである。マンハッタン管区のグローブズ司令官は、原爆製造プロジェクトそのものがソ連が敵である見方で進められていたと明言しているほどである。<sup>(18)</sup>

歴史的事実としてさらに指摘できるもう一つの理由は人種偏見である。米国人は開戦直後から戦争を人種の観点から見ていた節がある。真珠湾攻撃以来、戦争中、日本人を「悪魔、猿のような人間、野蠻人、獣」と見ていた。ドイツとの戦争では、ドイ

ツ人全体が対象ではなく、ヒトラーとナチスが敵であるが、真珠湾の奇襲攻撃以来、アメリカ人の怒りは日本人という人種に向けられた。黄色い小さな生き物で、無気味ににやにや笑いながら爆弾を落とす人種のように看做されていた。<sup>(19)</sup>

この他に、トルーマン大統領の個人的な性格も大きな要因であるとの見方もある。人種偏見もありさらにソ連の拡張主義を嫌い、男らしいところを見せたい大統領のパーソナリティーが原爆投下決断に少なからぬ影響を与えた、と考えるのである。トルーマン大統領は、日本人の真珠湾奇襲攻撃を決して忘れなかったし、大統領の主な関心はすでに触れたがソ連の拡張主義対策にあり、第三次世界大戦を防ぐためにも、男らしい外交をしたかったのである。<sup>(20)</sup> 勿論大統領の個人的な性格も否定できないが、やはり当時の国際情勢や人種偏見等が彼の内面に存在し、最終的に原爆投下決断に繋がったとみるのが妥当であろう。

広島に原爆を投下したエノラ・ゲイの機長であったテイベツ将軍の談話記録が残っている。1966 年 9 月に行われたインタビューの記録である。この中で機長は幾つかの注目すべき発言をしている。爆弾投下の目標を設定する背景にある理由が、爆弾の破壊力を研究できることであること、<sup>(21)</sup> さらに戦後少数の科学者と一緒に被爆地に入ったことにも言及して、科学者たちは科学的観点から、自分は軍事的観点から何が起こったかを自分の目で確かめたのだ、とも証言している。<sup>(22)</sup> こうした証言からは、科学者も軍人も実践で使用したいという点で一致していた事実が浮かび上がる。マンハッタン管区の司令官であるグローブズ将軍も、日本との戦争で実践テストするよう強く主張していた。<sup>(23)</sup> 戦後トルーマン大統領の命令で設立された、原爆傷害調査委員会の医師たちの目的が治療ではなく調査であったことなどからも、科学者、軍人、政治家ともに実践での使用とその破壊の結果への関心では繋がっていた事実を垣間見ることができる。このように考えてみると、ソ連封じ込めや人種偏見だけではなく、軍関連施設への投下が目的であるように見えても、人間への投下実験を秘かに狙っていたのではなかったのか、と解釈したくなるのは筆者だけであろうか。

## IV

ここで一人の被爆者から手記を頂いているので要約して紹介したい。I氏が国民学校1年生のときに大太平洋戦争が始まる。昭和16年12月8日の朝のラジオのニュースで、日本軍がハワイの真珠湾を攻撃したことを知る。家族は両親と7才年下の弟がいる4人家族。色々な物資や食料が不足し、配給制になり、人々の生活が不自由になっていくなかでも、幸せに暮っていた。軍需工場につとめていた関係で召集されなかった父親にI氏は可愛がられていた。昭和20年に小学校6年生になり8月を迎える。当時は戦時体制で夏休みは10日から20日迄であった。集団疎開で多くの友達が田舎に疎開していたが、「死ぬときは家族と一緒に居た方が良い」との父親の考えで疎開はしなかった。

8月6日は平日授業の日である。朝からとても良い天気だった。父は電休日在家にいた。電力が不足して工場が休みになることもあったのである。父、母、そして7才年下の弟に見送られて、元気いっぱい「いってきまーす」と云って学校へ向かった（これが最愛の家族との永遠の別れになってしまう）。仲良しの同級生Aさんと鉄筋コンクリート三階建校舎一階のかどにある靴脱ぎ場に着いたのがちょうど8時15分。履物を脱いで上履きに履き替えようとしたそのとき、一瞬まわりが真っ暗になる。爆心地から350メートルの至近距離にあった学校である。10数名の教職員と約400名のこどもたちの命が奪われる。原爆投下の真下にある学校である。この学校関係者の今日までの唯一の生存者はI氏一人だけである。その日、やがてまわりが少し明るくなったので、同級生Aさんと一緒に校庭に出て周りを見ると、広島全体が火の海だった。学校の裏に流れている川に行きかけたとき全身が黒焦げになった人がすがりついてきた。誰と聞くと、同級生であった。つないであった小舟にその同級生を横たえたときにその同級生は息を引き取る。川から出た後黒い雨が降り出す。一体何が起こったのか分からないまま町の中を当てもなく歩き出す。焼けた市電に片足をかけたままでこと切れている人、窓から身を乗り出して亡くなっている人、焼け死んでいる馬、そんな中を歩く。やがてトラックに乗せられて市外に連れていかれる。どこの田舎だったか分からないが、1

週間何を食べても何を飲んでも全部もどしてしまふ。偶然隣のおねえさんに会ったが両親と弟のことは分からない。生死の境を1週間くらいさまよった後、同級生Aさんのお父さんがAさんを迎えに来る。しかし、自分を迎えに来る人は誰もいない。やがて別な市に住む叔母のところに移り住むが、髪の毛が全部抜けてしまう苦しみを経験。治療した医師の話によると、被爆直後に致死量の30倍にもなる放射線を浴びているとのことである。幸いコンクリートの壁の陰にいたので直接熱線に晒されずやけどはしなかったものの生きていること自体が奇跡であると告げられる。急性放射能症から徐々に立ち直っても食べ物もあまりなくひもじい思いをし、何よりも家族のことを思い出して悲しい涙を流して生きてきた。やがてどうにか中学を卒業し、女学校や大学まで行かせる願いを父は持っていたが、上の学校へ行く事などできなく、美容院の住み込みで働き出す。しかし常に体のだるさに悩まされる。その後も生きるためにいろいろな仕事をするが、新しい生活を求めて関東に移る。被爆者を一種の伝染病のように見る人もいて自分が被爆者であることを話せずむしろ隠すようになる。そのうち、同級生のAさんは分かれた後1週間後に死亡したと、それに両親は被爆直後に郊外のお寺に運ばれてそこで亡くなり、弟は母の目の前で焼け死んだことが判明する。外見は健康そうに見えてもこれまで胃けいれん、肝臓の腫瘍、甲状腺癌、大腸癌、脳の腫瘍、骨髄肉腫等で、手術と入退院を繰り返す。被爆者は何十年経っても放射能の影響で苦しむ。人間同士が殺しあう戦争はこの地球上からなくならなければいけない。再び核兵器が使われるようなことがあってはならない。言語障害が残るかも知れないと云われながらも、まだ話すことができる。命ある限り、自分の体験を通して、戦争、特に核兵器がどんなに恐ろしいものであるか、平和の尊さ、大切さを訴え続けて参りたいとI氏は締め括っている。

I氏の肉体的な治療には医師がかかわることができようが、I氏の心を専門の心理カウンセラーであれ誰が慰め、癒すことができるであろうか。

I氏の今後の健康が守られることを切に祈り、このような手記を寄せてくれたことに対し心よりお礼申し上げたい。

## V

筆者は、どのような核廃絶運動がもっとも効果的であるのか。また、どのような平和運動がより適切かを論じるほどそのような運動の歴史を研究していない。しかしながら、I 氏の証言および一言も発することなどなく一瞬のうちに命を奪われた何万人もの無念さを思うならば、いかなる理由があるにせよ、非人道的な殺傷兵器である核兵器を絶対に二度と同じ人類に対して使用してはならないことを、唯一の被爆国である日本が全世界に訴え続けなければならないと決意すべきではなかろうか。

さらに、同時に、当時のような国際政治状況、人種偏見等の再現を繰り返さないための不断の努力も必要不可欠である。日米関係は当然 60 年前と現在とは異なる。また、米ソの冷戦も終結している。しかしながら、現在の世界全体の現実を直視するならば、まだまだ戦争を含む国家間の争い、人種偏見等の火種は世界中に蔓延していると言わざるを得ない。

全世界を何度も滅ぼすほどの核弾頭が現在の世界には存在している。全世界には 4 万発もの核弾頭があるとされている。世界に核が存在するというよりは、まさに核の中に世界が存在しているような様相である。<sup>(24)</sup> 一旦核を使用すると限定核戦争ではなく全面核戦争になる確立が高い。また、現在はテロリストが核を手にする危険性、恐怖もある。米国やロシアの軍事衛星は地上の 25 センチ以下のものまで赤外線カメラで天候に関係なくとらえられるので、最近では核は目視できる地上に配置されなくなっている。<sup>(25)</sup> 米国の戦略核ミサイルを搭載している原子力潜水艦は一隻で 160 発の核弾頭を装備している。<sup>(26)</sup> 人類絶滅の危険性を抱えているこのような世界の現実を認識するならば、今やもはや国家単位やましてや人種ではなく、地球全体の安全システム構築を早急に模索し、実現しなければならない時代である。

60 年前のように戦争の相手国を降伏させ世界政治で有利な立場を得るために核を使用できるような時代ではない。核兵器使用を決断する者は世界全体の運命を手中に握っていることを自覚しなければならないのである。このような核状況下にある現在の世界では、いかなる軍人、政治家、科学者も、どのような国際状況や、どのような人種偏見があるうとも、何らかの CO-EXISTING (共存) の道を探

るか、あるいは CO-PERISHING (絶滅) のどちらかを選択しなければならない。

不思議なことであるが、自分の家で飼っていた金魚、鳥、ネコ、犬までが、まるで爆弾が落ちて自分達の生命が終焉するのを本能的に予知していたのかのように、その日の前に亡くなったり、どこかへ行ってしまった、との証言もある。<sup>(27)</sup> 人間の (予知?) 能力が動物より勝るかどうか試されているようではなかろうか。

原爆投下目標には京都も入っていたが事情で取り消された歴史的事実がある。アメリカ陸軍長官・原爆投下作戦責任者であるステイムソンが京都を目標から外す重要な役割を演じている。

グローブズを中心に、4 月 11 日に第 1 回、5 月の 10、11 の両日に第 2 回目の目標委員会 (Target Committee) が開かれて、京都、広島、横浜、小倉の 4 都市となったこと、そして、5 月 28 日の第 3 回の目標委員会では、その 4 都市から横浜と小倉が除かれ、新潟が加えられたことはすでに言及した。その後、京都は陸軍長官ステイムソンによって拒否され、小倉が復活する。7 月 25 日の、スパーツ大将对しての原爆投下命令書には広島、小倉、新潟の他に長崎が指定されていた。グローブズは目標から除外された京都を復活させようとしたが、ステイムソン陸軍長官が許可しなかった。京都へは焼夷弾爆撃も禁止された。実は長官は 1920 年代に京都を訪れたことがあり、日本の古都を破壊したくなかった。特に日本画が好きだったようである。<sup>(28)</sup> ならば、核攻撃を回避するための、絵などの芸術の力、都市の京都化、陸軍長官のような立場にある人物の文化都市訪問の確率 (?) を考えてみたくもなるが、原爆投下の経緯、背景、被爆のこれまでの考察から得られる結論を、被爆体験を聞いたこどもたちの作文の次の一節が素直に代弁してくれよう。「核兵器つくるのも 人間」「その核兵器使うのも 人間」「それをやめさせるのも 人間」「被爆者の訴えをわたしは未来にはこびます」。<sup>(29)</sup>

被爆者の耐え難い苦悩をことばにする瞬間確かに実態とは違うものになってしまう。被爆の生き地獄を的確に表現できなくて被爆者自身つい口走ってしまう、「もういっぺん原爆が落ちりゃあ、ようわかるんよ」ということばが、<sup>(30)</sup> 2005 年に生きている世界の人々の心にどのように響くであろうか。

## 注

- (1) 平岡敬著『希望のヒロシマ-市長はうったえる-』岩波新書, 1996年, p.76.
- (2) 近藤紘子『ヒロシマ 60年の記憶』リヨン社, 2005年, p.172.
- (3) 『ヒロシマ 60年の記憶』P.25
- (4) 奥住喜重 工藤洋三訳『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』東方出版, 1996年, p.257.
- (5) ロナルド・タカキ著 山岡洋一訳『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』草思社, 1995年, p.61.
- (6) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.61
- (7) 子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会編『広島・長崎 原子爆弾の記録』光陽印刷, 1994年, p.17.
- (8) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.64
- (9) 『広島・長崎 原子爆弾の記録』 p.17.
- (10) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』pp.65-66.
- (11) 『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』p.287.
- (12) 『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』p.234.
- (13) 『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』p.259.
- (14) 『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』p.260.
- (15) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』pp.66-67.
- (16) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.9.
- (17) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.36.
- (18) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』pp.13-14.
- (19) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.14-15.
- (20) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.196.
- (21) 『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』p.252.
- (22) 『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンドーヴァーから広島・長崎まで』p.260.
- (23) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』p.85.
- (24) 『核の20世紀 訴える世界のヒバクシャ』平和のアトリエ, 1997年, p.289
- (25) 共同討議『核戦争の危機に文学者はどのように対するか』不二出版, 1984年, p.252
- (26) 『核戦争の危機に文学者はどのように対するか』p.1.
- (27) 一井愛子著『きのご雲』杉並けやき出版, 2005年, p.90.
- (28) 『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』pp.89-90.
- (29) 日本原水爆被害者団体協議会製作『原爆と人間展』p.37.
- (30) 『希望のヒロシマ-市長はうったえる-』pp.107-8.